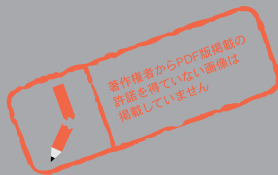


ネパール

を行く・前編

草の根国際協力隊



ネパールの病院と学校を
インターネットにつないだ先生たちの奮闘記



< プロジェクト参加者 >

影戸 誠：名古屋市立西陵商業高校 / 栗本直人：滝高校
近藤直門：愛知淑徳高校 / 後藤邦夫：南山大学

1

協力隊ネパール入国

(影戸)

前回ご報告したように、出発前のドタバタにもめげず各方面からの暖かい支援のおかげで高校教師3人がネパールへ向かうことができた。そこで、今回はネパールでの成果をご報告しよう。

カトマンズ空港に到着し、イミグレーションでビザの申請をする。早く出て、ゆっくりとビールを飲みたい一心で一番乗りだ。しかし、何やら様子がおかしい。自分の出したパスポートの前にどっと20枚ぐらいの人のパスポートが差し込まれている。職員の後ろに旅行会社の現地日本人エージェントらしき男が立っている。サンキュウと10ドル札を引き出しの中に落としている。

「あほかわれ！そんなことするから日本人がなめられるんだろーっ。どんな教育をわれがいましたかわかっとなのか」とつい広島弁で思ってしまった。後ろには老人や子供が暑い中おとなしく待っているのだ。

やっと順番が回ってきた。係官はフィニッシュ、フィニッシュと連発する。お前のパスポートの処理を終わったから金をよこせという意味らしい。知らないふりをしていと恨めしそうな、哀しい目で訴えてくる。たしかにこの職員とて月給が5000円程度だろう。観光客がどんどん増え、馬鹿なエ・ジェントが札たば教育をしていくのだ。それが、謙虚で自然とともに生きるネパールの国をどんどん正直者が馬鹿を見る国に変えていくことだろう。



「ナマステ」とあいさつしてくれた生徒たち

やっとのことでビザを手にする。入国審査はない。そのまま税関へ。持ち込んだコンピュータや周辺機器などを厳しくチェックされるのではと思ったが、意外にもチョクで箱にチェックマークを付けておしまいだった。

空港の外へ一歩出ると子供がどっと近寄ってくる。荷物をタクシ-まで運んでチップをせしめようというのだ。初めてこの国に来る人にとってはこの勢いと「チップ！チップ！チップ！」の連発に恐れをなし、1ドルくらい渡してしまうことだろう。1ドルとは50ルピーを意味する。若いウェーターが1日かけて稼ぐ金額だ。それを知らずに何人も日本人が渡している。「1ドルくらい仕方ないな」とどこかのおじさん。「ネパールのこと少しは勉強してこい」と言いたくなる。

2

初日から大忙し

ネパールに着いたら少しはゆっくりしようという期待もどこへやら、初日から日本にいたとき以上のハードスケジュールだ。

王宮の前の一等地にあるプロバイダーが開くところを見計らってさっそく訪問し、交渉を始める。出発までに間に合わず、機中で作成した学校間交流の資料はこのプリ

ンターで打ち出した。

昼食はダルバート。ネパールの最も一般的な食事で、ごはんに豆の煮込んだもの、マトン、野菜などを混ぜて食べる。豆の香ばしさがなかなかいい。

午後、栗本・近藤両先生はネパール用の名刺作りに印刷屋へ(2日後には肩書きも思いっきり立派な名刺ができあがった)。再びプロバイダーを訪れ、マシンを見せてもらった。Netscapeで3人のホームページも開いてみた。初めて外国、しかもネパールで自分のホームページを見られたのはやはり感激だった。夕方、ラム医師の車でドリケルへ向かった。

3

ドリケル病院にて

首都カトマンズから40分、中国国境に向かって走ると、建設中のドリケルホスピタルが見えてくる。この地域には99の村があり、人口498,000人が住む。しかし、そこには2、3の小さな診療所しかなく、医療活動がほとんど及んでいない状況であった。今やっと地域の人々の強い要望がかなえられつつある。

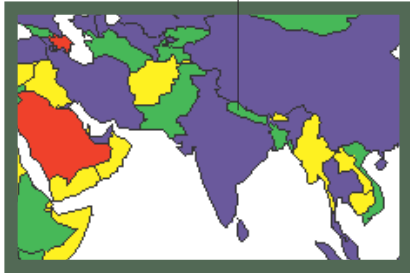
ラム医師は次のように語った。

「日本はどうしてあんなに短期間に経済復興できたんでしょう。ネパールは今多くの援助を受けながらも、発展できないでいます。どうしてそうなるのか。人々が自分のことしか考えないこと、さらには効率とすることを追求しないからです」

建設中の病院を案内しながらラム医師は自分の夢を次のように語った。

「この病院をこの国のパイロットプロジェ

N e p a l



Copyright ©1995 Larry Landweber



プロバイダーのMercantile Communicationsにて



ドリケル病院の建設現場



カトマンズのレストランでダルバートを賞味



病院へMacintoshを3台贈呈。

クトにしたいんです。医療の大切さをこの地域の人にもっと理解してもらいたい。日本からの協力には本当に感謝しています。ただし、この病院は地域住民の寄付と、趣旨を理解してくれた人々の寄付で建設されています。金額的に大きなプロジェクトではありませんが、我々の国が自立と誇りを持って取り組んでいけるために、そのモデルをこの国に示したいんです」

まずやってみる、これがこの国には一番大切なのだ。日本からのODAにしても、金額の9割が手数料として消え、工事に使われるのはわずか10パーセントだという。国や行政はまったくお金を出していない。日本のJAICAにも協力を要請している。特に病院管理のできる人材がほしいという。見学中にも、アメリカのボランティアグループが調査にやってくるが、なかなかうまく連携がとれていないように見えた。

「医療と教育、これがこの国を救うんですよ。今は電話や電気の状態が良くないので、この地域の学校とあなた方の学校をインターネットで結ぶことはできません。それはとても残念なことです。でも、病院の施設を使ってここからとりあえず発信できるようにしたいと思います」

4 現地での機器調整

(近藤)

我々の持ち込んだ4台のコンピュータ(Macintosh)は幸いにも100V~240Vの電圧をカバーしていた。本当に220VでMacがちゃんと動いてくれるかどうか、ネパールに着いて真っ先に確かめてみた。コンセントの変換アダプターを付けただけでMacは動いてくれてひと安心した。しかし、供給される電圧が一定しない。途中で突如電源が切れるのである。これには参ってしまった。ステイプラー(安定器)を電源とコンピュータの間に入れてかろうじて正常に動くようになった。その直後に栗本先生が「おっ、これもちゃんと動くよ。感激」と持参したThinkPadをコンセントにつないでカチャカチャ動かしていた。大胆にも100V仕様の電源アダプターをそのまま220Vに接続したのだ。確かにそのときThinkPadは動いていたのだが…。次に電源を入れたときには「永眠」していた。

ネパールでは電力不足のため電圧が不安定で、テレビやパソコンには安定器をつけて

ある。日本でも東京オリンピックの頃はテレビに付けて利用していた記憶がある。ネパールでは必需品なので電気屋で簡単に手に入るようだ。停電は日常茶飯事で、食事中に停電してローソクをともしたこともあった。

日本から用意していった海外旅行用のコンセント変換アダプターもくせものだ。形は合っているのだが、電極間の幅や電極の太さが微妙に違っている。ペンチで幅を調節しなんとか使えたものの、ちょっとしたことではずれたり接触不良を起こしたりしそうだった。ドリケルのホテルでは、電源のせいか接触不良のせいなのか、夕方20分ほどの間にMacが電源トラブルで2回もリセットされてしまった。安定器でも停電には無力で、ラム医師はワープロを使うときはこまめにセーブするのだと言っていた。

電話の交換機のほうは、海外旅行用の電圧変換トランスで動いたが、安いものはノイズが入り使い物にならなかった。電話は、家庭などで買い換えて不要になったものを持ち寄っていた。留守電機能などが付いたのもあり、使い方を説明しようとしたのだが、ボタンについている説明の文字はすべて漢字だ。フロッピーディスクのラベルを切り貼りして間に合わせたものの、海



学校へMacintoshを贈呈。左から栗本先生、副校長、校長、影戸先生、近藤先生



山の斜面に広がる耕地



重い荷物の運搬もほとんど人力が頼り



ネパールを象徴するヒマラヤの山並み

外へ持っていくときにはあらかじめ準備しておくべきだった。もっとも今回のようなあわただしさでは気付いていたとしても結局そんな余裕はなかっただろう。

5

接続する学校を選択

(影戸)

カトマンズはさすがに首都だけあって私立の学校が多く、英語はもちろんのこと、最近ではコンピュータ教育に力を入れている。どこかの学校とどうしてもインターネットを結びたかったので、プロバイダーの人に現地の高校を探してもらったのだが、あとで紹介したことを自分のビジネスに利用しようとする雰囲気を感じられた。この国では日本人の知人がいることや「口利き」が1つのステータスになっているのだ。

結局、ラム医師の紹介で、ホーリーガーデンハイスクールを訪れることとなった。校長は不在であったが、連絡を受けて直ちに飛んできた。不十分ながら5台のコンピュータを持っており、専属の教諭もいることから、この学校に決めた。

この学校よりはるかに恵まれた学校があることを我々は知っていた。わずか5パーセントの人が95パーセントの経済を牛耳っている社会である。5パーセント側の生徒と交流してもそれは真実のネパールを伝えない。我々は月収わずかに1万円前後の一般的な家庭の「高校生」との交流を夢見たのである。

ここまでのハードスケジュールで、私(影戸)がダウンしてしまっただが、1日程度の休養でrebootしてひと安心。

ホーリーガーデンハイスクール 生徒との対話

ホーリーガーデンハイスクールでは高校2年生の教室を見学できた。入ると同時に全員起立してくれた。日本の高校生も昔はこうだったのかもしれない。彼らの英語のレベルが知りたかったので2、3質問してみた。

「日本のことどう思う？」

生徒が校長先生に助けを求める。ネパール語で解説。

「I like it」

どうもその生徒は英語が得意ではないらしい。次の子に校長の目が輝く。できる子

らしい。

「こんにちは、日本のこと何か知っていますか？」

彼女はニコッと笑った。

「そんなに大きな国ではありませんが、産業と技術がとても発展しており、アジアで経済的にも文化的にもリードをとっている国です」

満点である。

その横の子にも質問。

「インターネットを知っていますか？」

「知っています。やってみたくはありますが、その設備がありません」

校長がその横から、

「今日この先生たちが、そのためのコンピュータを持ってきてくれて、接続もしてくれるんだ」

生徒たちの顔が輝いた。

「ナマステ(ありがとう)」といっせいに応えてくれた。

彼らの英語力とインターネットへの関心を知るにはこれで十分であった。

「日本のほくの生徒とぜひ交流をしましょう」

これはいけると思った。ただこの学校にはわずか5台のコンピュータしかない。それでファイルを作り、送信するということになる。ネパールでも珍しいインターネットに接続している学校になることで喜びいっぱい校長の表情を見て、とにかく接続第一歩としてはまずまずと思った。

6

いよいよ接続

(栗本)

Mercantile Communication はシンガポールのISPから3.4 kHz 音声帯域専用線で、IP接続しているネパール人によるISPだ。日本からは、ISPにもよるが、ネットワーク的には、米国西海岸(San Francisco, Los Angeles)からシンガポールへ行き、往復で



プロバイダーのルーターとモデム



今回インターネットに接続されたホーリーガーデンハイスクール



学校の生徒たち

1秒程度の距離にある。UUCPによる電子メールサービスとSLIP接続のサービスをしているが、PPPのサービスは今のところないようだ。128K専用線化を計画中とのことだ。

現地でPPPをサポートしていないので、はたと困ってしまった。日本だと主流はPPPであるが、ネパールでの今回のISPはSLIPしか提供してくれない。一応、マックのSLIPを用意して、インターネットマガジンの記事も用意していったが、現地に行って驚いたのは、マック君などの姿はなく、すべてIBM PC互換機であったことだ。UNIXとDOSの神様の存在の後藤先生を連れて行かなかったのは失敗と悔やんだが、あとの祭りである。

まずプロバイダーの担当者と接続の相談をし、設定を行った。NOCスタッフのキラン君も慣れないマックと付き合ってくれたが、文字は化けるし、PC版UUCPの設定の質問をネパール語と英語と日本語が飛びかう中で行わなければならない、内心えらいことになってしまったと思った。

結局、郷に入れば郷に従えて、学校のIBM PCにも、病院（市外）にも、UUCPでの電子メールサービスだけを入れてもらうことになった。シンガポールから現地までデジタル専用線が引かれてPPPサービスが始まるまでは、日本のようにはいかないだろうなとつくづく思った。

今回利用したプロバイダーではCISCO 2500（ルーター）と20台ぐらいのモデムが木製のラックの中に詰め込まれており、IBM PC互換機にBSDI BSD/OSを入れたマシンとWindows NTなどを入れたマシンが、ネパールの山の名前をとって、
chulu.mos.com.np（メールサーバー）
pumori.mos.com.np（DNSサーバー）
makalu.mos.com.np（WWWサーバー）
と呼ばれていた。サーバーを管理できそうな人間は、30歳程度の5名ほどで、インドで勉強してきたと言っていた。だが、Macintoshのことはあまり知らないので苦労した。

最終的に、接続できたサイトは、mos.com.npのサブドメインとして、

- Dhulikhle Hospital
xxxx@dh.mos.com.np
- Holy Garden School
xxxx@garden.mos.com.np
- 現地栗本連絡先（SLIP接続）
xxxx@pmtreks.mos.com.np

の3か所（user名はプライバシーの保護とメールが殺到して先方が困らないように隠してある）であった。

協力隊の帰国後、4月9日になって、自分たちがネパールから出したメールが、東海スクールネット研究会に届いたのであるが、その真相は、ネパールを出る前日にUUCPメールをspoolしておいて、ネパール側の高校がつかない瞬間に流れるようにセットしておいたのである。これから、xxxx@garden.mos.com.npに送れば、この学校の校長先生やコンピュータ担当の先生を通して、生徒さんと連絡がとれることになった。

やった～！

【カーストと教育】カーストでは下位のシェルバ族で、お金を持っている人の教育熱には驚かされる。一方、階層が一番上のシュレスタは確かに誇りを持っている。どちらの人も話をする機会を得た。その場の雰囲気から、カーストは形を変え、まだ存続していることを感じた。そのぶん、シェルバには、差別される側のパワーがあった。お金と教育によって自分の立場を築こうとしている。土地を買うにも差別があるとシェルバは言っていたが、そう言いながらも、学問とお金によってビジネスを広げていた。学問さえあれば官僚にだってなれるという、あの明治維新がいまネパール社会に起きつつある。ちなみに私学でエリート教育を受けるための学費は1か月あたり3000ルピーから5000ルピー（6000円から1万円）という。

インターネットへの接続を伝える栗本先生の電子メール

```
>At 10:52 AM 96.3.9 +0000, xxxxx@garden.mos.com.np wrote:
>This is N.kurimoto.
>Today, we contact with Kiran Pradhan,Principal of Holy Garden
>Boarding High School of Kathmandu.
>And we contact with Dawa Norbu Lama,Computer Instructor of
>same school.
>>From Japan we can contact through e-mail to Nepaly High-school
>from today.
```



象と遊ぶ休日



街角のE-mailサービス

7

ポカラでの束の間の休息

(近藤)

しばしの休息、ネパールに来たからにはヒマラヤのトレッキングをと企てたものの、天候悪くヘリコプターが飛ばずだめ。急遽ポカラ行となった。カトマンズから西へ飛行機で約1時間のポカラのペア湖はネパールを代表する観光地である。

土産物屋の立ち並ぶ中にE-mailの看板を見つけた。電話や航空券などの手配をしてくれる店の一角にIBM PCが1台置いてあり、お客は自分でキーをたたいて自由にメールを書く。奥にもう1台パソコンがあり、UUCPでカトマンズのプロバイダーを経由して送ってくれる。料金は1Kバイトで80Rs (150円くらい)、アドレスをコマで区切って2か所入れたら、ちゃんと2通分請求された。外人観光客の多い場所だけにお客は多く、1シーズンでパソコンも含めて元は取れると言っていた。日本では街角でのE-mailサービスは見かけたことはなく、ネパールのほうが進んでいるかもしれない。

ポカラのサランコットの丘で

往復500ルピー(約1000円)でタクシーを雇い、ポカラの郊外にあるヒマラヤの展望台サランコットへ向かった。サランコットに登りはじめると、子どもたちが"Give me candy. Give me ame."と言って群がってくる。餓はないというと、今度は"Give

me coin."と言ってくる。なかなかしつこい。"Do you need little guide?"とも言う。

あまりしつこいので100円で1人の少年をガイドに任命した。得意気に我々の前を歩いて道案内してくれる。サランコットは、観光のメインコースとなっており、カメラを向ければすぐお金を要求される。最後に少年たちが、"Give me schoolpen."と言ったのが印象に残った。今度訪れるときは、鉛筆や消しゴムを持っていこうと思う。

途中、農家の軒先でお茶を飲んだが、水は女性たちが額にベルトでつるした瓶に背負って運び上げてくる。たいへんな重労働である。どこかの国の援助で水を引いてもらったらいいが、壊れて利用できないという。我々がネパールに来た目的を聞いた青年は、この村に水を引いてほしいと話しかけてきた。

ポカラでも、チベット難民キャンプの学校と公立の高校を見つけて訪問した。高校のほうは休みだったが、校庭で子どもたちとボール遊びをしていた体育の先生が校長宅まで案内してくれた。校長先生は日本を訪問したことがあり、ぜひうちの学校にもコンピュータを入れて日本との交流をさせてほしいと、突然の訪問に戸惑いながらも熱心にアピールされた。しかし、「学校に電話はあるか」と聞いても直ちに「Yes」の答えが返ってこない。よく聞くと電話が不安定でありよくつながらないらしい。コンピュータを扱える人もいないようで、電子メールでの交流は諦めるしかなかった。校長先生は空港まで見送りに行くと言ってくれたが、ホテルに戻ってみるとフライト

時間の変更で、連絡する間もなく大急ぎで空港へ。休息とはいえ慌ただしいポカラでの2日間であった。

8

まとめ --- 今後の計画

(後藤)

さて、3人の先生が帰国して、新学期が始まりあわただしい中、4月にネパールでの活動報告のための臨時研究会が愛知淑徳高校で開催された。撮影された写真や面白いエピソードを披露したあと、今後も学校間の交流を続けていくためにホーリーガーデンの生徒さん(中3の女子、高2の男子)とつき添いの先生を9月中旬から2週間程度招待しようという話になり、全国の先生方の協力を得て計画が進んでいる。また本稿前編の読者の何人かからすでにご協力の申し出がある。もちろん、3人の先生のターゲットはネパールだけではない。他の国の学校とも交流を考えている。これはその第一歩に過ぎない。なんとパワフルな先生たちであろう...

また、「恵まれないアジア地域学校間ネットワーク構想」というものも計画されている。この構想は、ネパールをはじめ、タイの山岳民族やチベットなど、国際交流の面でいろいろ障壁を持った国の学生を招待して日本を見てもらうこと、そして、日本の学生には、その国の学生と交流することにより、日本の豊かさとそのことに対する責任を感じてもらうことを目的にしている。将来的には、そのような地域と独自のネットワークを張って相互の交流を図るつもりである。

今から10年前、栗本先生がインド国境で会ったチベット青年が言ったというTIBET is not China. TIBET is one country.という言葉が、いまだに頭に焼き付いている。日本にないこのような感覚が、アジアのいたるところに存在するのを知るのも大切なことだろう。(完)



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp